

## 藤原兼実の書

### 一 書の尊重

右大臣藤原師輔（九〇八～九六〇）の『九条殿遺誠』に「凡成長頼知物情之時、朝読書伝、次学手跡、其後許諸遊戲、但鷹犬博奕、重所禁遏矣、未趁官途之前、其所為亦如此、」とある。「読書伝」は経書及び史書を読むことであり、すなわち、学問を修めることである。「学手跡」は書を学ぶことである。藤原時代の貴族にとって、学問が最もたいせつであったことはいうまでもない。学問の次には書がたいせつであった。文書・記録・詩文・和歌を書くために、書は必要にして欠くことのできないものであった。それ故、学問の次に書が尊重されたのである。

藤原時代には書が尊重されたので、書を巧妙に書くことに努めた。それ故、書のじょうずな人がたくさん輩出した。そのうち、小野道風（八九四～九六六）・藤原佐理（九四四～九九八）・藤原行成（九七二～一〇二七）の三人は最も傑出している。そして「三賢」といわれた。三賢の筆跡を「三跡」という。三賢のほかに、能書として知られてい

### 春 名 好 重

る人がたくさんいる。藤原時代の摂関家の歴代も能書としてすぐれていた。御堂関白道長（九六六～一〇二七）は師輔の孫である。道長が能書であったことは道長自筆の日記『御堂関白記』によって明かである。道長は、行成のように、書を書くことに特別努力しなかった。『御堂関白記』は刻意の書ではなく、卒意の書である。しかし『御堂関白記』はみごとに書といつてよい。道長が行成のように、書を書くことに特別努力していたら、道長は行成にまさるとも、決して劣らない能書になったことと考えられる。道長の子である宇治関白頼通（九二二～一〇七四）の真跡は残っていない。頼通の子である京極関白師実（一〇四二～一一〇一）の真跡は、『御堂関白記』の古写本と『御堂御記抄』とがある。『御堂関白記』及び『御堂御記抄』の「大殿御筆」の「大殿」は師実である。師実も能書であった。師実の子である後二条関白師通（一〇六二～一〇九九）の真跡は『後二条関白記』の別記及び願文・写経がある。師通は能書として尊重された人である。師通の子である知足院関白忠実（一〇七八～一一六二）の真跡は旧記目録がある。忠実も能書であった。忠実の子である法性寺関白忠通

(一〇九七〜一一六四)は能書として最も傑出していた。そして、當時第一の能書として尊重された。月輪関白兼実(一一四九〜一二〇七)は忠通の子で、やはり能書としてすぐれた人であった。

藤原時代の貴族の教養として学問・書・詩文・和歌・音楽がたいせつであったように、鎌倉時代の貴族の教養としても学問・書・詩文・和歌・音楽はやはりたいせつであった。鎌倉時代の書は藤原時代の書には及ばないが、鎌倉時代にも書は尊重されたので、能書がたくさん輩出した。

## 二 兼実の生涯

兼実は久安五年(一一四九)に生れた。当時父忠通は従一位摂政で、この年十月二十五日に太政大臣に任ぜられた。兼実の母は女房として仕えていた加賀(藤原仲光の女、一一二四〜一一五六)である。久寿三年(保元元年、一一五六)兼実が八歳の時、加賀は三十三歳でなくなった。保元三年、十歳で元服し、正五位下に叙せられ、左少将に任ぜられ、その後、累進して、永暦元年(一一六〇)従三位に叙せられ、権中納言に任ぜられ、翌年、権大納言に昇進し、長寛二年(一一六四)十六歳で内大臣に任ぜられ、仁安元年(一一六六)十八歳で右大臣に昇進した。長寛二年、父忠通が六十八歳でなくなった。

忠通は保元三年に関白の職を子の基実(兼実の兄)に譲った。基実は永萬元年(一一六五)摂政になり、仁安元年(一一六六)なくなる

関白になった。しかし、治承三年(一一七九)基房は大宰権帥に左遷され、基実の子基通が関白になった。翌年、基通は摂政になったが、寿永二年(一一八三)源義仲は基通を罷免して、基房の子師家(十二歳)を摂政にした。しかし、翌年、義仲が没落すると、基通が再び摂政になった。

兼実が右大臣になった時、二十九歳年長の藤原経宗が左大臣になった。経宗は文治五年(一一八九)まで左大臣であったから、兼実もずっと右大臣で、昇進することができなかった。さらに保元元年の保元の乱の後には平氏の勢力が強大になり、藤原氏も平氏に圧迫された。基実の室は平清盛の女盛子である。それ故、基実は関白になり、摂政になったが、二十四歳でなくなった。基実がなくなると、基房が摂政になったが、嘉応二年(一一七〇)基房は清盛の孫資盛に凌轢された。

兼実は日記『玉葉』の安元三年(一一七七)四月十四日の条に「仏法王法、滅尽期至歟、五濁之世、天魔得其力、是世之理運也、惣非言語之所及、非筆端之可尽、夢歟、非夢歟、言而有余、歎而無益、不能左右云々」と記して、慨歎している。さらに五月一日の条に「惣天下之滅亡、別我氏之衰微、悉淚數行、哀哉」と記し、五月六日の条に「凡近日每夜炎上、強盜不可勝計、乱代之至歟」と記している。『玉葉』には、このような慨歎が度々記されている。

しかし、寿永四年(一一八五)平氏が滅亡すると、天下の形勢は一変した。この年、兼実(三十七歳)は右大臣で、内覧の宣旨を蒙り、翌年(文治二年)摂政になった。これは源頼朝の推挙によるのである。

頼朝は平氏を滅ぼして、威勢が強大になっていた。この年、兼実の子の権大納言良通（二十歳）は内大臣に任ぜられた。『吾妻鏡』の文治二年二月二十七日の条に、兼実は「和漢才智、頗令越人給云々」と記している。文治五年、兼実は太政大臣に任ぜられたが、建久元年（一九〇）に辞任した。この年、兼実の女任子は入内して、後鳥羽天皇の女御になり、立后し、後に宜秋門院といわれた。頼朝と親しかった兼実は頼朝の後援によって栄えることができたのである。しかし、頼朝と親しかった兼実は朝廷では嫌われた。そして、建久七年、兼実（四十八歳）は権大納言源通親（四十八歳）の策謀によって関白を止められ、前摂政の基通（三十七歳）が関白になった。この時、中宮任子は内裏を退出した。兼実の子良通は文治四年に二十二歳でなくなり、兼実の室（藤原季行の女）は建仁元年（一二〇一）に五十歳でなくなり、不幸が重なった。後鳥羽天皇は建久九年（一一九八）に皇子の土御門天皇に譲位された。通親は土御門天皇の外祖父になる。正治元年（一一九九）兼実の子内大臣良経（良通の弟、三十一歳）が左大臣になり、通親が内大臣になった。現世に希望を失った兼実は建仁二年（一二〇二）五十四歳で出家し、法名を円証といった。この年、良経は摂政になり、元久元年（一二〇四）太政大臣に任ぜられたが、建永元年（一二〇六）五十八歳の兼実に先立って、三十八歳でなくなった。その翌年すなわち承元元年（一二〇七）四月五日に兼実は五十九歳でなくなった。兼実は摂政になるまでは不運であった。幸に摂政になり、関白になったが、十年ばかりで再び不運になり、関白を止めさされた。

兼実の時代、すなわち、平安時代の末、鎌倉時代の初めは、貴族階級にとっては不幸な時代であったのである。兼実の時代は古代の末、中世の初めで、古代から中世に移る過渡期であった。

### 三 兼実の教養

大外記清原頼業（一一二二―一一八九）は明経博士になり、高倉天皇（一一六一―一一八一）の侍読になった。『玉葉』の安元三年（一一七七）五月十二日の条に、頼業は「吐和漢才、詎敢比肩、誠是国之大器、道之棟梁也」と記し、寿永二年（一一八三）十月二十二日の条に、頼業は「可謂賢士」と記し、十一月十四日の条に「頼業、於明経道、不恥上古之名士也」と記している。兼実は頼業をすぐれた学者として尊重した。頼業を尊重した兼実は学問並びに学者を尊重した人であり、兼実も学問を修めることに努めた人である。『玉葉』の治承三年（一一七九）十月十四日の条に、兼実は大外記中原師尚から「本朝世紀上帙十卷」を借りたと記している。『本朝世紀』は藤原通憲（信西、一一〇六―一一五九）が撰じた。十月十一日の条に『本朝世紀』を所持していたのは師尚だけで、ほかに所持していた者はいなかったというところが見えている。兼実はまだ世間に流布していなかった『本朝世紀』を読むことに努めたようである。それ故『吾妻鏡』に、兼実の「和漢才智、頗令越人給云々」と記されたのである。

兼実は能書として傑出した忠通の子であるから、やはり能書としてすぐれた人であった。しかし、父の忠通ほどの能書ではなかった。ま

た、子の良経ほどの能書ではなかった。それでも、当時は能書として尊重されたのである。

兼実の漢詩は知られていない。『中右記部類』紙背の漢詩の作者「右馬頭兼実」は月輪関白兼実とは別の人であり、時代も違う。『玉葉』の承安元年（一一七一）六月五日の条に「密々有詩、題云、飛泉為夏友」と記し、承安二年九月十二日の条に「儒士兩三人、不期而会、有少連句事」と記し、承安四年二月六日の条に「文士四五輩、不期而参来、聊有聯句事」と記し、寿永元年（一一八二）七月十八日の条に「有小連句并詩等事」と記している。それ故、兼実は漢詩・連句を作らなかつたのではなく、時々作っていたことがわかる。しかし、詩人といわれるほどの人ではない。

兼実は漢詩よりも和歌を愛好した。兼実の和歌は『千載和歌集』以下の勅撰集に六十二首選入されている。『玉葉』の承安元年六月五日の条に「又当座有和歌、題云、水辺忘夏、契明夕恋」と記している。その後、和歌に関していろいろなことを記している。兼実は歌合を度々催した。また、連歌をした。初めは藤原清輔（一一〇四～一一七七）が歌合の判者になっていた。治承元年六月二十日に清輔がなくなると、翌年から藤原俊成（一一一四～一二〇四）が招かれた。『玉葉』の治承二年六月二十三日の条に、今夜はじめて俊成が来たと記している。また、俊成は「於和歌之道、為長者」と記している。兼実は治承二年三月二十日から六月二十九日まで十日ごとに歌人を集めて百首歌を作らせた。それは『右大臣家百首』といわれている。この『右大臣家百

首』を書写したのが伝西行筆（一一一八～一一九〇）の『五首切』である。治承三年の秋・冬には前大宰大貳の藤原重家（清輔の弟、一一二八～一一八〇）に和歌の判をさせた。しかし、そのころも俊成は兼実に用いられていた。摂政になるまでの兼実は和歌に熱心であったが、摂政になってからは熱心でなくなったようである。

藤原定家（一一六二～一二四一）が選んだ『小倉山莊色紙和歌（小倉百人一首）』には、兼実の父忠通の和歌「わたのはらこぎいでてみればひさかたのくもゐにまがふおきつしらなみ」、兼実の子良経の和歌「きりぎりすなくやしもよのさむしろにころもかたしきひとりかもねむ」、兼実の弟慈円（一一五五～一二二五）の和歌「おほけなくうきよのたみにおほふかなわがたつそまにすみぞめのそで」は選入されているが、兼実の和歌は選入されていない。兼実は第二流の歌人として認められていたのであり、第一流の歌人としては認められなかったようである。

兼実は琵琶のじょうずな人であった。源経信（一〇一六～一〇九七）自筆の『琵琶譜』（卷子本、一卷）の紙背に「右大臣正二位兼行皇太子傳藤原朝臣兼実」「正三位行権大納言兼行右近衛大将藤原朝臣兼実」と書いている。兼実が「正三位行権大納言兼行右近衛大将」であったのは十三歳～十六歳の時であり、「右大臣正二位兼行皇太子傳」であったのは十九歳の時である。また「件手并衆等、所受習故兵部卿資通卿也、資通卿者、信明弟子也、信明者、博雅二郎也、仍次第習来也」と四行に書いている。源博雅は克明親王の子で、醍醐天皇の孫に

なる。信明は博雅の子である。参議源資通（九九六～一〇六〇）は丹波守済政の子で、宇多天皇の皇子敦実親王の玄孫である。また、巻末に「応保三年、自禅閣所下賜也、帥大納言経信卿自筆、二条殿御物也、可秘藏々々」と三行に書いて、花押を据えている。応保三年（一一六三）は長寛元年で、兼実が十五歳の時である。「禅閣」は出家した前関白の忠通である。「二条殿」は後二条関白師通であり、忠通の祖父である。すなわち、兼実の琵琶は、博雅―信明―資通―経信―師通と伝えられた。師通は琵琶のじょうずな人として有名である。経信自筆の『琵琶譜』は経信から師通に伝えられ、師通から忠通に伝えられて、忠通から兼実に伝えられたのである。『玉葉』の嘉応二年（一一七〇）閏四月十六日の条に、高倉天皇が御物の琵琶の修理を兼実に仰せ付けられ、兼実は修理して、二十日に返上したことを記している。安元元年（一一七五）閏九月七日の条にも、二十一日の条にも、参内して琵琶を弾いたことを記している。忠実や忠通は箏の琴のじょうずな人であった。

『玉葉』の安元二年（一一七六）五月十七日の条及び寿永四年（一一八五）三月十日の条に、刑部卿藤原頼輔（一一二二～一一八六）、そのほかの「当世之鞠足（蹴鞠のじょうずな人）」七、八人が蹴鞠をしたことを記している。兼実は蹴鞠に興味を持っていたらしい。兼実も蹴鞠のじょうずな人であったのではないかと考えられる。

兼実の時代には、天台宗の教学は深遠に過ぎて解しがたかったし、真言宗の加持祈禱は不安の解消に役立たなかった。それ故、源信（九

四二～一〇一七）が『往生要集』を著して以来さかんになった浄土教が信仰されて、ひたすら阿弥陀如来の本願に救いを求めたのである。兼実も浄土教を信仰した。『玉葉』によれば、安元二年（一一七六）八月二十五日、兼実（二十八歳）は仏敎を請じて戒を受け、治承二年（一一七八）九月には毎日終日念仏に努めた。当時、不安動搖の絶え間が無かったから、『玉葉』の治承四年五月十六日の条に「所憑只仏神三宝而已」と記し、五月二十三日の条に「只仰天道、憑神明、信三宝、凝謹慎許歟」と記し、十一月一日の条に「只所仰三宝神明之護持也」と記して、全く悲観している。養和二年（一一八二）三月二十日、兼実（三十四歳）は湛教を請じて、戒を受けた。そして『玉葉』に「大願成就、爰而炳焉、歡喜之至深、無物于取喻者歟」と記している。非常に喜んだことがわかる。この日、在俗の兼実であるが、法名を真理といった。当時も法華信仰はやはりさかんであったから、元暦二年（寿永四年、文治元年、一一八五）二月十日、願蓮房に謁し、『摩訶止観』第一巻を四、五張ばかり読んだことを『玉葉』に記している。

兼実は源空（法然房、一一三三～一二二二）に最も深く帰依した。

『玉葉』の文治五年（一一八九）八月一日、兼実（四十一歳）は「法然房之聖人」を請じて「法文語及往生業」を談じたことを記している。八月八日、兼実は源空から戒を授けられ、その後、念仏を始めた。また、建久元年（一一九〇）七月二十三日、建久二年八月二十一日、建久三年八月八日にも戒を受けて、念仏を始めたことを記している。その後何度か戒を受けた。建仁二年、兼実が出家した時に戒師になっ

たのは源空である。承元元年（一二〇七）源空が流罪に処せられた時、兼実が悲歎にくれた。そして、臨終の際に中納言藤原光親に源空赦免に尽力することを依頼したということが『法然上人行状絵図』（第三十五卷）に見えている。しかし、兼実がなくなった承元元年には中納言藤原光親はいない。建久九年（一一九八）源空は『選撰本願念仏集』を撰した。これは兼実のために撰したのである。

#### 四 忠通・兼実・良経の比較

法性寺関白忠通は詩人にして歌人であり、さらに能書として最もすぐれていた。忠通の詩集は『法性寺殿御集』があり、歌集は『多田民治集』がある。忠通は度々歌合を催した。また『類聚歌合』を撰せしめた。忠通の和歌は『金葉和歌集』以下の勅撰集に六十九首選入されている。天永二年（一一一一）十月五日、十五歳の忠通は「松猷還年遊」の漢詩を作った。その漢詩は「優美」で、衆人が「感申」した。ことに「手跡」はまことに「神妙」であった。それ故、若年のころから能書としてすぐれていたことがわかる。保元二年（一一五七）新造の大内裏の門や殿舎の額は忠通が書いた。そして「昔の上手」に劣らない手書きといわれた。『今鏡』（藤波の中第五、三笠の松）に、忠通は「まな（漢字）も、かなも、このもしく、今めかしき方さへそひて、すぐれておはしましき」と見えている。忠通の真跡は消息及び請文が残っている。忠通の書風は当時の人に愛好されたので、広く流行した。藤原教長（一一〇九）の『才葉抄』に「法性寺殿（忠通）の御筆

（書）はかく人の右へひらみたる也」、「法性寺殿の手跡は、若年の時、摂政の時は能（よき）也、後には筆ひらみて、打付／＼書給によりて、習ふ人の手跡損すべきなり、何（いづれ）も此心を得べき也」、「行成の手跡は筆に任せてかかれたるとみえたり、又、法性寺殿の筆は不然、よっておとらせ給ふ也」と評している。忠通の書跡といわれている古筆は『葦手下絵往来切』『葦手下絵和漢朗詠集』『酸漿（かたばみ）切』『近衛殿切』『多多良切』などが少しあるだけである。

後京極摂政良経は嘉応元年（一一六九）に生れて、建永元年（一二〇六）三月七日に三十八歳でなくなった。慈円の『愚管抄』（巻七）に、良経について「公事ノミチ、職事ノ方キハメタル人ノ昔ニスギタル詩哥ノ道ヲキハメテ」、「又、執政臣（摂政）ニナリテ、同能芸群ニヌケタリキ、詩哥、能書、昔ニハデズ、政理、公事、父祖ヲツゲリ」と書いている。また『増鏡』（おどろのした）に、良経について「このおどろはいみじき歌の聖（ひじり）にて、（後鳥羽）院の上、同じ御心に和歌の道をぞ申し行はせ給ひける」と見え、後鳥羽院（一一八〇—一二三九）の『後鳥羽院御口伝』には「近き世になりては、大炊御門前斎院（式子内親王）・故中御門摂政（良経）・吉水前大僧正（慈円）これら殊勝なり」、「故摂政（良経）はたけをむねとして、諸方を兼ねたりき、いかにぞや見ゆる詞のなさ、哥ごとに由あるさま、不可思議なりき」と評されている。良経は若年のころから漢詩を作ることに努力していたことが『玉葉』に記されている。『本朝書籍目録』に「詩十体、一卷、中御門摂政集」が見えるが、残っていない。内大臣三

条西実隆の日記『実隆公記』の明応五年（一四九六）十月三日の条に「宗祇法師来、行二法師来、後京極撰政詩集自筆一卷持来、無双之靈物也、驚目了」と記している。漢詩も、書も、ともにすぐれていて、みごとであったことと考えられる。良経の歌集は『秋篠月清集』がある。良経の和歌は『千載和歌集』以下の勅撰集に三百十三首も選入されている。『玉葉』の文治四年（一一八八）四月七日の条に、二十歳の良経が文を草し、さらに清書した願文は、文も、書も「共以優美之由、人々感嘆」したということを書いている。良経は度々額・願文・色紙形を書いた。当時第一の能書として尊重されたので、額・願文・色紙形を度々書いたのである。慈円の『慈鎮（慈円）和尚自歌合』の跋に、良経は「能書当世第一也、歌仙当（世）第一也」と書いている。関白一条兼良（一四〇二―一四八一）の『尺素往来』には「法性寺忠通、後京極良経両殿下、超於四輩、均三賢者也」と見えている。「四輩」は能書の藤原文正・小野奉時・紀時文・菅原文時の四人である。道風・佐理・行成の三賢にひとしいとはいえないが、当時は三賢と同じように尊重されていたらしい。良経の真跡は消息と『般若理趣経』とが残っているだけである。良経の書風は大体において忠通の書風と同じようであり、当時の人に愛好されたので、良経の書風も広く流行した。良経は歌人として特別尊重された人であるから、良経の書跡といわれている古筆は、『歌仙切』『九条殿切』『嵯峨切』『常知切』『内侍切』『豆色紙』『和漢朗詠集切』など、たくさんある。鎌倉時代の書跡で書風が良経の書風であるのは良経の書跡といわれている。

忠通も、良経も、詩人としてすぐれた人であり、また、歌人としてすぐれた人であり、さらに能書として傑出した人であった。それ故、忠通も、良経も、当時第一の能書として尊重せられ、忠通の書風は法性寺様とか法性寺流とかといわれ、良経の書風は後京極様とか後京極流とかといわれて、当時はもちろん、鎌倉時代にも広く、長く流行した。行成の子孫の世尊寺家の世尊寺流は朝廷では用いられたが、一般には世尊寺流よりも法性寺様及び後京極様の方が用いられた。兼実の書もすぐれているが、それよりも忠通の書並びに良経の書の方がすぐれているといわなければならない。さらに兼実は詩人といわれるほどの人ではない。また、歌人としては忠通や良経ほどに尊重されなかった。それ故、撰政・関白になり、太政大臣になったが、忠通や良経のように尊重されなかったのである。

## 五 兼実の真跡

兼実の真跡は願文・処分状案・消息が残っている。それ故、兼実の刻意の書と卒意の書とを見ることができる。すべて漢字の書跡であり、かなの書跡は残っていない。忠通・良経の真跡も漢字の書跡が残っているだけで、かなの書跡は残っていない。

治承四年（一一八〇）十二月二十八日、平重衡の兵火によって東大寺・興福寺が焼亡した。寿永二年（一一八三）東大寺の大仏が修補された際、兼実は大仏に仏舍利を奉納した。その願文が前田育徳会に所蔵されている。それは縦二七・八センチ、長さ三・〇八メートルの

卷子本一卷で、牡丹蔓唐草文様の金欄の表紙をかけている。その見返には金・銀の砂子を一面に撒いている。この表紙はもとの表紙ではなく、近世になってかけかえられたものである。本紙は斐紙六張で、金・銀の砂子を一面に撒き、切箔・野毛を置き、非常に華麗である。

願文は楷書と行書とをまぜて、五十六行書いている。巻首に「敬白、奉籠金銅盧遮那仏大像、生身法身舍利事」と三行に書き、末尾に「寿永二年五月十九日、弟子従一位行右大臣藤原朝臣兼実敬白、正二位権大納言兼右近衛大将藤原朝臣良通」と三行に書いている。字形は縦長にして整齊であり、偏が小さくて、旁が大きい。点画は遒勁にして用筆に独得の癖がある。書風は法性寺様である。寿永二年に兼実は三十五歳であった。

文治五年（一一八九）兼実は治承四年に焼亡した興福寺の南円堂を再建した。そして、仏師康慶に不空羂索観音・四天王・六祖師等の像を作らせた。この年九月二十七日、兼実は奈良に下向し、二十八日、開眼供養が行われるに際して、仏像の胎内に仏舎利三粒及び紺紙金字の『宝篋印陀羅尼経』『法華経観音品』『不空羂索経』『般若心経』各一卷を奉納した。写経は兼実が如法に書写したのである。この願文は縦二四・五センチ、長さ四〇・九センチの卷子本一卷である。料紙は紺紙で、銀界を引き、文字は金泥で書いている。願文は行書二十行で、末尾に「于時文治五年九月廿八日、敬以敬白、大日本国摂政従一位藤原朝臣兼実敬白」と書いている。各行の上部に二字分ばかりの空白を残している。字形は縦長にして整齊であり、やはり偏が小さくて、旁

が大きい。点画はおだやかで、兼実のほかの真跡とは少し違うように見えるが、金泥で書いているのでおだやかに見えるのであり、ほかの真跡とは少し違うように見えるのである。そして、やはり兼実の真跡である。文治五年に兼実は四十一歳であった。

この願文の末尾に別紙を継いで、関白近衛政家（一一四四～一一五〇）が「後法性寺殿（兼実）御筆也、可秘可尊々々、左大臣（花押）」と三行に書いている。また、別紙を継いで、権大納言鳥丸光広（一一五七～一一六三）が「右後法性寺殿御筆并御奥書分明也、左相府者近衛殿政家公也権大納言光広」と三行に書いている。

道風の『屏風土代』『三体白詩卷』『智証大師諡号勅書』、行成の『白楽天詩卷』『後嵯峨院本白詩卷』『本能寺切』などは、字形は端正にして点画は秀潤温雅であり、運筆は沈着である。行成は消息も字形を端正に書いている。消息はたいいてい卒意の書であるが、行成の消息は刻意の書である。道風・行成の書風は当時最も愛好されたので、広く流行したばかりでなく、さらに長く伝えられた。藤原時代の書跡には書風が道風風・行成風であるのが多い。忠通の書風は道風風・行成風の継承である。しかし、道風風・行成風そのままではなく、少しことなっている。忠通の時代には強いものが好まれた。それまでは柔装束が用いられていたのに、当時は強装束が用いられるようになったことは、強いものが好まれたあらわれといつてよい。道風・行成の書は弱い書ではなく、おだやかな書であり、筆力のある書であるが、力を外にあらわさないで、内にひそめている。それにひきかえ、忠通の書は力を



外にあらわしている。また、道風・行成の字形は大体において方形であり、端正にして調和があり、癖が無い。しかし、忠通の書跡には縦長の文字が多い。さらに字形にも、点画にも、独得の癖がある。忠通の真跡で残っているのは消息と請文とだけで、額・色紙形や詩文を書いたのは残っていない。しかし、額・色紙形や詩文を書いた書跡と消息・請文とは基本的には同じようで、大きな違いは無いのではないかと考えられる。忠通の消息・請文は入念に書いている。忽卒に書き流したのは無い。

兼実の書風は忠通の書風をそのまま継承しているといつてよい。字形も、点画も、大体において同じようであり、ただ僅かな違いが認められるだけである。巧拙をいえば、忠通の書の方が巧妙であり、さらに規模が大きくて力強い。忠通の書風は個性が顕著であるから、法性寺様とか、法性寺流とかといわれて、尊重され、愛好されたが、兼実の書風は忠通の書風をそのまま継承したので、忠通の書のようにもてはやされなかったのである。

兼実の願文は「佛」の第七画、「利」の第七画、「到」の第八画、「岸」の第八画などの縦画を特別長く書いている。また「生」の第三画、「法」の第五画などの縦画も特別長く書いている。長過ぎるといってもよい。また「人」の第二画、「大」の第三画、「受」の第八画、「来」の第七画、「永」の第五画や「原」の第二画、「者」の第四画なども特別長く書いている。「人」「大」と同じように「也」の第三画、「途」の第十画、「是」の第九画などもやはり特別長く書いている。

「之」の第三画は特別長くて、大きく彎曲させている。横画は縦画のように特別長く書いていない。しかし、自署の「實」の第七画は特別長く書いている。その右の方は短くて、左の方が極端に長くなっている。道風・行成も縦画を少し長く書いた文字があるが、兼実のように特別長く書いたのは無い。兼実は偏を小さく書き、旁を大きく書いて、変化を見せている。道風・行成の書の変化は調和のある変化であり、自然に生じた用筆の変化であるが、兼実の書の変化は調和の無い変化であり、わざと作った変化といわなければならない。それ故、兼実の書よりも道風・行成の書が高雅であり、格調が高いといわれているのである。

兼実の兵部卿平信範（一一二―一一八七）あての消息は、信範自筆の日記『兵範記』の仁安四年（一一六九）四月の紙背文書三十八通中の一通である。この消息に連続している文書には仁安三年の年紀があるのがあるから、この消息も仁安三年の消息と考えられる。料紙は縦二九・七センチ、横五四・五センチであるが、第三行の末の文字は少し切れているから、料紙の縦の長さはもう少し長かったことがわかる。行草体七行で、本文は「奉覽、少内記貞親申民部丞文、二分代以豊原能時請申内舍人、右二通奉之、殊可被奏聞之状如件」と五行に書き、日付は「四月六日」、差出所は「右大臣（花押）」、充所は「頭弁殿」と書いている。料紙の端と奥とに大体同じぐらいの広さの余白がある。仁安三年に右大臣であったのは兼実であり、頭弁は権右中弁で藏人頭の信範である。信範は忠通の家司であった。兼実は信範に少内

記貞親の申文と豊原能時の申文とを送って、奏聞を依頼したのである。第一行及び第四行以下の四行は少し右に傾斜している。第三行・第三行は字数が多いので、上下の文字をつめて書いている。「親」の第二画、「豊」の第六画、「右」の第二画、「弁」の第三画、「文」の第二画、「人」の第二画、「原」の第二画などは特別長く書いている。「記」「請」の第二画・第四画も特別長く書いているが、第四画を特別長く書いているのは珍しい。「弁」の第三画は彎曲させている。長い横画を彎曲させるのは法性寺様の特色の一つと云ってよい。字形は整っていない。点画は筆力があるが、用筆は巧妙とはいえない。仁安三年は兼実の二十歳の時である。それ故、まだ洗練されていないのである。

草書で「自是進記候之儀、悦給候了、只今中院へ立寄候、□□者歟、無沙太（汰）候間、相待晩催候也、向後細々可申承候也、謹言」と六行に書いて、日付を「乃刻」と書き、差出所は花押を据えて、料紙の端に「雨夜侍坐、真実残多候」と二行の返し書きをしている。消息は、いつ、誰にあてた消息かわからない。「乃刻」は「即刻」であり、消息を受け取って、直ちに返事を書いた場合に書く。差出所に名を書かないで、花押を据えただけの消息は長上の人にあてた消息ではない。それ故、忽卒に、速く書いている。第一行は点画を太く、濃く書き、第二行は細く、薄く書き、第三行は少し濃く書いているが、第四行以下は細くて、渴筆が多い。墨をつがないで、たくさん文字を書いてある。日付と差出所並びに返し書きは濃く書いている。大きい文字と小さい文字とを適宜まぜて書くのが普通であるが、大体において行の

上の方の文字は大きくて、下の方の文字は小さくなっている。「自」「給」は字形を特別縦長に書いている。「中」の第四画、「沙」の第七画、「申」の第五画、「刻」の第九画、「夜」の第八画は特別長く書いている。この消息は「四月六日」付の平信範あての消息よりも巧妙で、洗練されている。

兼実の処分状案は、兼実がその女任子（一一七三—一二三八）に最勝金剛院領・九条堂領等を譲与する処分状の草案である。任子は後鳥羽天皇の皇后になり、後に宜秋門院といわれた。最勝金剛院領・九条堂領等とはもと皇嘉門院（忠通の女聖子、崇徳天皇の中宮）が兼実の子良通に譲与されたが、良通の没後は兼実が管領していた。処分状案は縦三〇・三センチ、長さ八・三六三メートルの卷子本一巻で、端裏に「月輪殿自筆御処分状」と書いている。「月輪殿」は兼実である。この端裏書の筆者はわからない。巻首に「宜秋門院」と書いているのは宜秋門院にあてた文書であるからである。末尾に日付を「元久元年四月廿三日」と書き、次に「摂政」と書いているのは摂政良経の自署であり、その次に「念仏沙弥（花押）」と書いているのは兼実の自署である。当時兼実は入道して念仏に努めていたので「念仏沙弥」と書いたのである。良経は兼実の子、任子の兄である。さらにその次に高く「摂政」と書いているのは、この文書を良経の許にとどめることを示している。元久元年（一二〇四）に兼実は五十六歳、良経は三十六歳、任子は三十二歳であった。行草体で、忽卒に、速く書いている。点画は勁健にして筆力がある。書風は法性寺様であり、巧妙にして優秀で

あり、兼実が能書であったことを示している。

卷末に摂政九条道房（一一六〇九～一一六四七）が「右月輪禪定殿下御遺誠也御筆、永代伝家正流、可為亀鏡者也、寛永廿一年六月六日書之、左大臣（花押）」と四行に書いている。「月輪禪定殿下」は入道した兼実をさしている。「御筆」は「御自筆」である。道房は兼実の子孫で、「家正流」である。寛永二十一年（一一六四四）に左大臣であったのは道房である。この処分状案はもと九条家に伝えられていたが、現在は天理図書館に所蔵されている。

## 六 兼実の尊重

道長の日記『御堂関白記』の記事は簡略であるが、兼実の日記『玉葉』の記事は詳細である。そして、書に關する記事がたくさんある。

このことは兼実が書に対して関心を有していたことを示しているといつてよい。また、兼実は額・色紙形・外題などを度々書いたことを記している。このことは兼実が能書として尊重されたことを示している。

『玉葉』によれば、仁安二年（一一六七）十二月九日、東宮の御書始が行われた。この御書始に用いられた御書の外題は兼実が書いた。

外題を書くのは能書または高貴の人である。高貴の人も書のじょうずな人でなければならぬ。仁安二年に兼実は十九歳であったが、右大臣で、皇太子傳になっていた。さらに兼実は書のじょうずな人であった。それ故、御書始の御書の外題を書いたのである。東宮は後の高倉天皇（一一六一～一一八一）である。御書始には『孝経』を読むこと

が例になっていた。

嘉応二年（一一七〇）閏四月十六日、兼実（二十二歳）は高倉天皇から琵琶を修理することを仰せ付けられ、また『古今集』（卷下）を書写することを仰せ付けられた。兼実は琵琶のじょうずな人であるから琵琶の修理を仰せ付けられ、能書であるから『古今集』の書写を仰せ付けられたのである。

権大納言藤原（吉田）経房の日記『吉記』の承安三年（一一七三）七月二十日の条に、建春門院（平滋子）建立の最勝光院の額は兼実に揮毫を依頼することに決定したと記している。六勝寺のうち、法勝寺の額は権中納言藤原伊房（一一三〇～一一〇九六）が書き、尊勝寺の額は左大臣源俊房（一一〇三五～一一二二）が書き、最勝寺以下の寺の額は法性寺関白忠通が書いた。それ故、最勝光院の額は兼実（二十五歳）に揮毫を依頼した。しかし、兼実は承諾しなかった。『玉葉』の九月九日の条に、度々懇請されたが、「当時之嘲哂、後代之誹謗、有恐有憚」といつて固辞した。また、十月五日には最勝光院の障子の色紙形を書くことを懇請されたが、やはり固辞した。女院とはいえ、家格の低い家に生れた人が建てた寺の額であるから、固辞して書かなかったのではないかと考えられる。さらに十月十五日には願文及び咒願文の清書も依頼された。やはり固辞した。しかし、度々の懇請により、二十日に額を書き、十一月二十七日に色紙形を書いた。額や色紙形は能書が書くものである。古代・中世の人は小字は巧妙に書くことができたが、大字は書く必要が無かったので書かなかった。それ故、大字の

額は能書でなければ書くことができない。また、たいせつな額を能書でない者に書かせることはできない。屏風・障子の色紙形は書き直すことはできない。それ故、能書でなければ書くことはできなかったのである。

承安四年二月一日、八条院が嵯峨に建立された蓮花心院の額を書くことを依頼された。八条院（一一三六―一二一一）は鳥羽天皇の皇女暲子内親王である。兼実は一度はことわったが、まもなく書いた。そして、二十二日に額を八条院に届けた。

六月十九日、建春門院は兼実に『法華経』（第二巻）の書写を依頼された。兼実が書いた最勝光院の額は都率天の内院に納められた夢想があつたから、さらに『法華経』の書写を依頼されたのであるが、兼実は右大臣を経師扱いにするのを嫌つたのではないかと考えられる。書けない、書くにしても、蒜を服薬しているので、涼しくなるまで書くことはできないといった。

しかし、身分の低い者が建てた小堂の額でも、いなかの山寺の額でも、兼実は請われるままに書いている。その場合は、仏に結縁のために額を書いたのである。

承安五年七月十三日、権中納言平宗盛から厳島神社の鳥居の額を書くことを依頼されて、承諾した。安元三年（一一七七）六月十八日、厳島神社の額を書いて、宗盛に届けた。依頼されてから二年後のことである。「厳島」は「伊都伎嶋」とも「伊津伎嶋」とも書く。兼実は「官文殿式正文」を調べて「伊都伎嶋」と書いたということである。

「官」は太政官である。

安元元年（一一七五）閏九月十九日、兼実（二十七歳）は十七日の和歌会における藤原清輔の判に感服して、消息を送った。清輔の返事に、兼実の消息を錦の袋に入れて「家宝物」とすると書いてあった。清輔は兼実に称揚されたことを光榮として、その消息を宝物としてたいせつにしたのであり、ただ巧妙な書跡であるから宝物としたというのではないが、ともかく、兼実の消息は特別に尊重されたことがわかる。

安元二年の秋から三年の夏にかけて、高倉天皇は紺紙金字の『法華経』『無量義経』『般若心経』『阿弥陀経』を書写されて、法華八講が行われ、安元三年七月五日に結願した。その外題は兼実が書いた。また、その願文・咒願文も兼実が書いた。

治承二年（一一七八）六月五日、兼実（三十歳）は高倉天皇の仰せによつて書いた卷子本を献上すると、天皇は非常に喜ばれた。そして、御物の名筆劇跡を取り出されて、兼実に示された。さらに自ら名筆劇跡を写すとともに兼実にも薄様に写させられた。両本とも兼実に下賜されたということである。このことは天皇と兼実とが名筆劇跡の鑑賞をするともに名筆劇跡を写したことを示しており、天皇は兼実を能書として尊重されていたことを示しているといつてよい。

治承三年八月三十日、兼実は参内して、高倉天皇に拝謁し、「近代人」が書いた卷子本を拝見した。この日、兼実は後白河院の仰せによつて詞を書いた絵巻物『末葉露大将』（第一）を平親宗の手を経てた

てまつた。九月二日には天皇の仰せによって卷子本に漢詩・和歌を書いた。九月三日、天皇は兼実の書跡を非常に喜ばれて、精良な筆十管を下賜された。この日、天皇の仰せによって、兼実が御前でかなを書いて、おめにかけた。

比叡山横川の霊山院の額は行成が書いた。額は破損し、文字が消滅したので、堂の修造とともに額を作り、揮毫を兼実に依頼した。兼実は「善事」であるから病気をたすけて額を書いて、治承四年八月二十三日に届けた。行成が書いた額はほとんど消滅していたが、字形は大体わかったので、原本と塵ほども違わないように、すなわち、行成が書いたように書いたということである。治承五年九月八日には四天王寺の西門の額を書いた。

養和二年（寿永元年、一一八二）四月十三日、兼実（三十四歳）は高さ一丈二尺（三・六四メートル）、幅一尺二寸（三六・四センチ）の卒都婆を書いた。これは大字であろうと考えられる。寿永二年八月二十七日には八条院にかなを書いて献上した。八条院は兼実のみごとなかなを愛好されたので、兼実にかなの書跡を求められたことと考えられる。寿永三年十二月二日には日吉社の「御正体図絵」の銘を書いた。日吉社の御正体の銘であるから、さっそく書いたのである。元暦二年（寿永四年）八月二十二日、比叡山で十種供養が行われた。必要な雑具は兼実が調達し、さらに願文は兼実が書いた。結縁のために書いたのである。諷誦文は良経（十七歳）に書かせた。良経は早くから書を巧妙に書いていた。

文治二年（一一八六）二月十四日、後鳥羽天皇の御手習の手本を兼実に求められた。兼実は手本は無いといって献上せず、また、書いて献上することもしなかった。しかし、文治三年五月十一日、宸筆の消息を下されて、かなの手本を書くことを仰せ付けられたので、物忌の際であったが、さっそく請文をたてまつった。それ故、書いてたてまつったことと考えられる。四月二十六日、後白河院は兼実に『拾遺抄』の書写を仰せ付けられた。

『吾妻鏡』の文治五年九月十日の条に、兼実が平泉の毛越寺の金堂円隆寺の額を書いたことが見えている。毛越寺を建立した藤原基衡（一一〇五ごろ～一一五七ごろ）は摂政兼実の額を望み、懇請して書いていただいたのである。この額を書いたのはこの時より前で、いつのことかわからない。

このほか、兼実はいろいろな書を書いた。摂政になるまでは、ことわり続けながら、たいとい書いていたが、摂政になってからは、なかなか書かなかった。兼実が摂政になったのは三十九歳の時である。書を書くことができないような年齢ではないが、摂政になると、かるがるしく筆を執らなくなったらしい。

文治三年（一一八七）四月二十六日、後白河院が『拾遺抄』の書写を仰せ付けられたが、四年後の建久二年（一一九一）八月十三日に『拾遺抄』の書写を催促されたと『玉葉』に記していることによって、後白河院の仰せによってもなかなか筆を執らなかったことがわかる。建久七年に閑白をやめさされてからは、揮毫の依頼もほとんどなくな

り、また、依頼されても、おそらく承諾しなかったことと考えられる。

## 七 兼実の写経

兼実の写経は残っていない。しかし、度々写経をしていたことは『玉葉』によって明かである。当時の貴族は信仰のために写経に努めた。兼実もやはり信仰のために写経をしたのである。

治承二年（一一七八）十月二十六日、兼実は毎月朔日に書写した『般若心経』十三巻一軸の供養を春日社の宝前で行った。治承四年四月三日には紺紙金字の『般若心経』五巻の供養を春日社の宝前で行った。翌日『理趣経』を書写した。梵字を書くことは俗人の兼実にはできないので、梵字は実敵に書いてもらった。七日には弘法大師の影前で『般若心経』の供養をした。また、紺紙金字の『理趣経』の供養を高野山ですることにした。

養和二年（一一八二）正月二十二日、兼実は皇嘉門院のために経供養をした。兼実が『法華経』『無量義経』『観普賢経』及び『観無量寿経』『八名経』等を書写した。その料紙は皇嘉門院の書跡を用いられた。反故を料紙としたのであるから消息経である。当時は故人の冥福を祈って、故人の書跡を料紙として写経をする消息経の書写が流行していたのである。寿永元年（一一八二）七月十四日にも皇嘉門院のために消息経供養が行われ、文治五年（一一八九）十月二十三日には良通のために一日のうちに『法華経』を書写して、供養した。これは寄り合い書きである。

当時は『法華経』が最も多く書写された。法華信仰が一般にひろまっていたからである。その次に『般若心経』の書写がよく行われたようである。『般若心経』は最も短い経巻で、一巻の書写が容易であり、かつ『般若心経』は特別尊重されていたので、『般若心経』の書写がよく行われたのである。写経することは当時の貴族にとっては日常生活の一部であったのである。

## 八 兼実が尊重された理由

兼実は頼朝の推挙によって摂政になったこと、兼実の日記『玉葉』は記事が詳細で、平安時代の末、鎌倉時代の初めの史料として重要であることなどはよく知られている。兼実は能書としてすぐれた人であるが、父の忠通と子の良経とがともに当時第一の手書きとして尊重せられ、そのため、兼実の影が薄くなり、能書としてはよく知られていない。忠通の子、兼実の兄の基実は早くなくなった。基実の子基通は高倉院が敵島詣をされた時に願文の清書をした人であるから、能書であったが、能書として知られていない。基実の弟、兼実の兄の基房は後鳥羽院が建立された最勝四天王院の額を書いた人であるから、やはり能書であったが、能書として知られていない。摂政・関白になるほどの人は書もじょうずであったことと考えられる。摂政・関白の書であるから尊重されたとはいえないと思う。兼実の真跡は願文・消息・処分状案が残っている。また、書に關していろいろなことを『玉葉』に記している。そのため、兼実が能書であったことがわかるが、もし

真跡と『玉葉』とが残っていなかったら、兼実が能書として知られることはなかったことと考えられる。

忠通の時代に能書としてすぐれていた人は藤原朝隆（一〇九七―一五九）及び藤原教長（一一〇九―）である。朝隆がなくなってから五年後に忠通がなくなった。教長は忠通がなくなってから十三、四年後まで生きていたが、保元元年（一一五六）の保元の乱の後に出家し、常陸国に流され、赦されて都に帰ってから高野山に登った。都にいても、入道した人であるから、書によっては書くことができなかった。朝隆の子朝方は能書で、権大納言になったが、兼実に比べると、家格も、官位も、ともに低い。行成の子孫である世尊寺家は書の重代の家として尊重された。また、書の故実を伝えていたので尊重された。しかし、当時の伊経は官位が低かった。その中で兼実は家格官位ともに高くて、その上、能書としてすぐれていた。そのため、兼実は当時第一の能書として尊重されたのである。

（本学教授・国語国文学）